かぜ 緑風

2020年6月23日発行
No.47
早稲田大学本庄高等学院通信
発行：早稲田大学本庄高等学院　発行人：半田　亨　〒367-0032 埼玉県本庄市栗崎239-3 ☎0495-21-2400 【URL】https://www.waseda-honjo.jp

言葉が光る

学院長　半田　亨

「絶望に慣れることは絶望そのものよりもさらに悪いのである。」

3月2日から開始された登校禁止状況がまさか、こんなに長引くとは誰も思わなかったでしょう。長く続く自宅での自粛生活の中、ストレスや不安が溜まっていきます。

このようなとき、読書が心の支えになります。新型コロナウィルス感染が拡大し始めた3月頃からネットニュースや新聞でカミュの「ペスト」が紹介され始めました。194*年（原文ママ）アルジェリアの港町オランに起こったペスト感染という架空の事件を題材とし、医師リューとその周囲の人々の様子を描いています。今回の感染拡大に状況が似ているからか、社会的に話題になっています。カミュは読んだことがなかったので、一度読んでおこうと思い本を探しました。おりしも図書館は閉館しており、どの書店で探しても売り切れでした。あきらめきれずに結局注文して入手しました。二日で一気に読み終えました。文学作品を読むのは本当に久しぶりです。あらすじや書評、この本を今読む意義については、ネットニュースで多く触れられているのでここでは書きません。

読んでみて教訓的に心に残る言葉が多いことに驚きました。冒頭の言葉はその1つです。

「世論というやつは、神聖なんだ―冷静を失うな、何よりもまず冷静を失うな、さ。」（新潮文庫、「ペスト」、宮崎嶺雄訳、53p）、「世間に存在する悪は、ほとんど常に無知に由来するものであり、善き意思も、豊かな知識がなければ、悪意と同じくらい多くの被害を与えることがありうる。」（193p）、「愛はいくらかの未来を要求するものであり、」（269p）、「趣味の良さというのは物事を強調しないことにある」（372p）、「健康とか無傷とか、なんなら清浄といってもいいが、そういうものは意志の結果で、しかもその意思は決してゆるめてはならないのだ。」（376p）、「すなわち人間のなかには軽蔑すべきものよりも賛美すべきもののほうが多くあるということを、」（457p）

どれもが、今後自分の会話やスピーチの中にさりげなく使いたい言葉ばかりです。

その後調子に乗って、改めて自分の本棚の埃のかかった本を広げて読んでいます。同じ極限状態を扱ったものにウィーン大学医学部神経科教授フランクルがナチスドイツ強制収容所での体験を描いた「夜と霧」があります。この本は、確か学生時代にドイツ語の先生が紹介なさっていたのを受けて、古本屋で購入したものです。ここでは、フランクルが極限状態における周囲の人々の行動を精神医学的側面から客観的に分析し、かつ自分がいかに生きる意志を失わないように努めたかを綴っています。「ユーモアもまた自己維持のための闘いにおける心の武器である。」（みすず書房、フランクル著作集1「夜と霧」、霜山徳爾訳、131p）、「すなわち人間が彼の苦悩を彼の十字架としていかに引き受けるかというやり方の中に、たとえどんな困難な状況にあってもなお、生命の最後の一分まで、生命を有意義に形作る豊かな可能性が開かれているのである」（168p）、「『すべては目的がない』からである。かかる人々（人間的に崩壊してしまった人間、半田注）は、著しく困難な外的状況にこそ人間に内面的に自らを超えて成長する機会を与えるものだということを忘れているのである。」（175p）、「すなわち人生から何をわれわれはまだ期待できるかが問題なのではなくて、むしろ人生が何をわれわれから期待しているかが問題なのである。」「人生というのは結局、人生の意味の問題に正しく答えること、人生が各人に課する使命を果たすこと、日々の務めを行うことに対する責任を担うことに他ならないのである。」（183p）

教訓じみた言葉はともすると「何を偉そうに」、「だから何なんだ」という反感を招きかねません。一方で、その言葉の中にしみじみとした味わいや共感、気づきを感じられるものもあります。数学的にはたぶん有限個しかない単語や品詞の組み合わせにすぎませんが、組み合わせ方によって言葉が光ってくるのは不思議なことです。そこが文章力なのでしょうが、同時に読み手側の読解力と想像力がないと、どんなにいい言葉でもその深さを読み取れません。

「夜と霧」を読んでいくと、私が学生時代に引いた赤鉛筆が残っていましたが、今回は改めて別のところに黒鉛筆で引かれたラインが増えました。当時より少しは私も経験を積んでいるのかもしれません。

「早稲田魂」

保護者の会　会長　髙橋　信介

東風香る季節となり、夢と希望に満ちあふれてスタートした２０２０年。自らの夢を実現する為に早稲田大学へと巣立っていった卒業生。希望と不安の中で入学してきた新入生。様々な思いが折り重なった年頭初でした。

しかし、新型コロナウイルスの世界的蔓延により、思わぬ事態へと急展開してしまいました。

日本国内も東京オリンピックに向け国中が盛り上がりを見せる最中での開催延期という急ブレーキは誰にも予想できない結果でした。

多くの人が夢や希望を失い、暗く沈んだ日本、世界となった現在、生徒の皆さんも同じような心境かと推察いたします。

この現実に皆さんはどう立ち向かうのでしょうか？誰かの助けをひたすら待つのか？じっとしているのか？それとも、自ら道を見つける為に動き出すのか？人それぞれの考えがあり、どの選択肢が合っているのかも分かりません。

そんな中、早稲田大学は、他の大学に比べいち早くすべての面で動き出しました。まるで大学界の先駆者となるべく、非難を浴びる事になっても多くの決定事項を誰よりも早く公表しました。これは非常に勇気のいる行為です。普通に考えれば、危険な時こそ、誰かに先を行ってもらい、その道が安全であれば、こっそりその出来上がった安全な道を無難に追随してゆく人が多い事でしょう。

しかし誰かが道を切り開かねば、その道筋は永遠に開かれる事はありません。失敗すれば笑われますが、成功すればその人は勇猛果敢な挑戦者・時代のパイオニアたるチャレンジャーとして英雄になります。

今回、私は早稲田大学の気概と信念の強さ、日本をけん引してゆく勇気と底力を見させつけられました。

正しいと思った事を正々堂々と告げ、実行に移す。当たり前だが現代社会では非常に勇気のいる事だと思います。この精神は「早稲田魂」として過去百三十八年、脈々と沢山の学生に受け継がれ、社会の中枢として、今の日本を支えている原動力になっているのだと実感しました。

その流れを汲む早稲田大学本庄高等学院の皆さん。皆さんは、この『早稲田魂』の後継者だという事に自信と誇りを持っていただきたい。先の見えない困難な時代に、いかに立ち向かってゆくか？今まで培ってきた自分の力と、本学院生として身に付ける力を思う存分発揮するチャンスです。

多くの人が今はピンチだと落ち込んでいます。一方この状況下でもしっかりチャンスを掴んでいる人も大勢います。あるマーケティングの先生は、今回の元に戻る事の無い新しい社会という変化は『予期せぬ急変』ではなく『未来の前倒しだ』と言っています。未知の感染症もオンラインのデジタル社会もいつかは起こる事象であり、慌てる事ではないと。

社会が早稲田に期待し、求めているのは、時代を引っ張ってゆくリーダーシップや困難を乗り超える為の術（すべ）と知だと思います。術（すべ）とは卓越した技術やノウハウ。知とは心を癒す文学や気概・勇気・考え方です。

その求められる術と知を身に付ける第1歩がこの本庄高等学院での学生生活だと思います。豊富過ぎる程の自然に恵まれ、自然災害も少なく、新幹線や高速道路など交通も至便なこの地で、決して奢ることなく、常に謙虚で、常に前向きで、常に人を想いやり、常に友情を大切にする、そんな高校生活を送って頂ければ幸いです。そして社会が、世界が求める人財に大きく成長する事を願っています。

本庄の地で育んだ『早稲田魂』で「頑張るんべえ！」（本庄弁）

本庄高等学院の新型コロナ感染防止に向けた取り組みと、皆様へのお礼

休校中およびキャンパス閉鎖期間中は、皆様には大変なご不便ご心配をおかけしてしまいましたことを、まずもってお詫び申し上げます。

新型コロナウイルスの感染が世界中に広がる恐れがあるとの報道を受け、早稲田大学は国内の大学に先んじて２月14日に最初のメッセージを発表いたしました。付属校である本庄高等学院でも、大学本部や関係各機関と連携を密にし、学院生、保護者ならびに教職員、関係者の命を守ることを第1に考え、様々な対策を講じてきました。同時に、情報収集に努め、できる限り正確な情報を皆様にお知らせし、その時点で最善と思われる対策をとってまいりました。

学校として最も重要である学習につきましては、インターネットをフル活用した学習システム（Moodle）をベースに、オンライン授業を5月11日より開始しました。オンライン授業実施にあたりまして、保護者の皆様には経済的ならびに人的なご負担をおかけすることになってしまい、この場をお借りしてお詫び申し上げます。

オンライン授業は教員も初めてのことであり、開始までに教材作成などの準備期間を設けた上で実施に至りましたが、システムの予期せぬ不具合や、アクセス集中によるコンテンツの不配信、設定ミスなどが発生してしまい、学院生には大変ご迷惑をかけてしまいました。申しわけありませんでした。

また、本学院の特徴の一つである寮においては、休校中の寮生の心身両面の健康が心配されたため、大学本部や保健所、運営会社と協議を重ね、できる限り自宅で過ごしていただくことを決めました。ご理解をいただいた寮生・保護者の皆様に心より感謝を申し上げます。

寮で生活する学院生は、本庄高等学院が作成した生活の指針を理解して適切な行動をとってくださったおかげで、一人の感染者も出さず現在に至っております。

今後、順調に感染が収束に向かえば、6月29日から対面授業が開始されます。本庄高等学院としましては、引き続き学院生・保護者・学院関係者の健康を第一に、再開後の授業形態を慎重に考え、安全と効果的な学習方法の両立を図ってまいります。定期テスト、学校行事、各種イベントなども徐々に組み入れ、1学期に実施できなかった行事を復活させることも検討中です。

先が見通せず、心が重くなる状況ですが、教育環境を整備し、満足度の高い学院教育を行ってまいりますので、今後とも本庄高等学院の教育にご理解ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

教員コラム

木もれ日

北京大学での墳墓画像研究

地歴科教諭　三﨑　良章

二〇一九年度、特別研究期間を取得し、北京大学で魏晋南北朝時代の墳墓画像研究に従事した。早稲田大学と北京大学の間には一九八三年から交換研究員制度があるが、二〇〇三年度に続き、今回もその制度のもとで「北京大学交流学者」として活動した。所属は歴史学系であったが、実質的には中国古代史研究中心を研究の拠点とした。

二〇〇四年以来、約一五年にわたって魏晋時期の墳墓画像を用いて研究を進めてきたが、ここ数年、それを一つにまとめる必要性を感じるようになっていた。そこでこの特別研究期間を利用して、まずこれまで調査してきた中国各地の墳墓画像の再確認と未見及び新出資料の調査を行なうことを計画した。四月以後、河北省(石家荘)、甘粛省(敦煌・嘉峪関・酒泉・張掖・蘭州)、青海省(西寧)、内蒙古自治区(フフホト)、新疆ウイグル自治区(クチャ・ウルムチ・トゥルファン)、陝西省(西安)と調査をつづけ、一月には雲南省(シーサンパンナ・大理・昆明)を初めて訪れた。

そのうち石家荘の河北博物館の東魏茹茹公主墓や北斉高洋墓の壁画は初見であったが、北朝後期の墳墓画像の魏晋時期との相違と隋唐との連続性を実感することができた。また西寧市博物館の北魏時期の湟中徐家寨出土模印磚も初見であったが、同市湟中県河湟文化博物館展示の復元模型とともに、北朝時期の墳墓画像の一類型を認識することになった。さらに雲南省昭通の霍承嗣墓は魏晋時期中国南部少数民族地帯における墳墓壁画墓の孤例であるが、雲南省博物館の展示模型はその全体像を理解するのに非常に有効であった。いずれも研究の中心の魏晋時期中国北部の墳墓画像を相対化するのに大いに寄与することになった。

一方、二度目の訪問となった張掖市博物館には一二点の画像磚が展示され、そのうち七点に甘粛省の「高台駱駝城出土」というキャプションがついている。これらを詳細に観察したところ、そのうちの高台駱駝城二号墓出土の二点、高台許三湾墓群出土の一点を除く他の九点は高台苦水口二号墓からの出土であることが明らかになった。これによって苦水口二号墓出土の画像磚は高台県博物館展示の一二点と合わせて二一点となり、全貌がほぼ明らかになっている苦水口一号墓の七一点の画像磚との比較研究が可能になった。現在その検討を行なっているが、一号墓と二号墓には画像内容の共通性が多くある一方、一号墓の画像が二号墓のそれより鄭重に描かれていること等が明らかになりつつある。こうした検討を進めることで、共通性と差異を伴う墳墓を隣接して築造する魏晋時代の高台社会の一面が明らかになっていくと考えている。

以上のように一月の雲南の調査までは、当初意図した調査研究を順調に進めることができた。それが一転したのが新型コロナウイルス感染症の大流行である。現在では一二月には流行は始まっていたと理解されているが、私が武漢での流行の情報を知ったのは一月初であった。それでも北京は平穏であり、雲南の調査も予定通り行なって一月下旬の春節直前に北京に戻った際も問題はなかった。ところがそれから一週間程度のうちに事態が急速に悪化したため、やむなく二月初に一時帰国の心づもりで日本に戻った。結局その後も北京に復帰できずに現在(六月初)に至っている。

こうしたコロナ禍によって、三月に予定していた遼寧省の調査を断念しなければならなくなった。遼寧省の遼陽と朝陽は私の墳墓画像研究の原点であり、それらの再調査と新資料の把握によって今回の特別研究期間は完結することになるはずであった。しかしそれを実現することはできず、また研究をまとめることも不可能になってしまった。コロナ禍に対する恨みは深いものである。しかし歴史学研究者としては、歴史的制約を甘受、あるいはそれを利用して研究を展開しなければならないとも考えている。コロナ禍によって宿題ができたわけであるが、私の本庄学院での残りの任期を魏晋時期墳墓画像研究の完成に当てようと、現在は考えている。

クチャ・スパシ故城にて

スーパーグローバル ハイスクール（SGH）の取り組み

― 5年間の指定期間を終えて ―

本学院は2015年度よりスーパー・グローバル・ハイスクール（SGH）に指定され、5年間にわたる研究開発と実践を重ねてまいりました。「国際共生のためのパートナーシップ構築力育成プログラムの開発」をテーマに、多くの国内外パートナー校や協力団体とともに数々のプロジェクトを推進することができました。

2019年度末に発行した研究開発報告書においては、最終年度の成果報告に加え5年間の総括と今後の展望を記載しました。また、これまでの「緑風」でも事業の展開を紹介しております。いずれも学院のウェブサイトよりご覧いただけますので、本号では在校生による昨年末の2本の発表を通じて学院生自身が到達した知見と提言の一端をお示しいたします。

Ⅰ ソウル国際高校との授業内協働学習の研究成果例報告（SGH研究課題A-1）

＜発表タイトル＞　“Education Environment in Japan and South Korea？To Make Human Resource Development Better”（日本と韓国の教育環境―よりよい人材育成のために―）

＜研究メンバー＞　古川夏帆、田川優衣、藤井美空、Kim Haeun、Park Soojin、Lee Toyeon

＜発表概要＞　現代の高校生は教育の重要性を認識しながら、授業の目標や与えられる課題の内容に疑問を感じることがある。そこで、アンケート調査などをもとに教育の目的を再確認し、両国の教育への提言をまとめるべく協働研究に取り組んだ。

韓国と日本はともに学歴を重要視する国として認識されているが、公立の受験進学校であるソウル国際高校の生徒と、学内推薦を目指す附属校である本学院の比較を行ってみると、大学入試の出題内容や形態が生徒の意識に影響を及ぼしていることがうかがわれた。チームで行った検討により、実践学習経験や創造性に重きが置かれる入試になれば教育の意義を高校生がより強く感じられるようになるだろうという結論を導いた。

Ⅱ SGHシニアスタッフ代表による研究成果報告

＜発表タイトル＞　“Aiming Partnership Construction -- the Impact of Collaborative Researches and Symposiums and Future Plans”（パートナーシップ構築のために―協働研究およびシンポジウムのインパクトと今後への提言―）

＜発表者＞　西川なずな、渡辺瑛、滝田愛澄、鈴木心愛

＜発表概要＞　SGHが学院生の成長に与えてきたインパクトを知るため、指定期間中の学びの経験を振り返り、特に①国内外パートナーとの協働プロジェクト、②シンポジウムでの活動のインパクトに焦点を当てて整理を試みた。

双方とも参加者は「話し合い」から強いインパクトを受けるが、①の協働プロジェクト内の「話し合い」は参加メンバー内で行われ、問いへの答えを協働で追求する活動であること、②のシンポジウムでの「話し合い」は知見や異見に接する場であり、参加者が仲間にその発見を伝えることで、「話し合い」のインパクトが広範に波及しうる活動であることを再認識した。高校が「国際共生パートナーシップ構築力」を伸ばす場であり続けるために、話題提供者と参加者間の意見交換に重きを置いたセミナーを定期的に開くことを提案した。そのようなセミナーが、国内外パートナー校も交えて実施できることを期待する。

Ⅰは必修「政治・経済」の授業に組み込まれた韓国のパートナー校との協働学習による成果です。11月のSGH成果報告会では別のグループが口頭発表し、海外ゲストとも英語による質疑応答を行いました。ⅡはSGH生徒実行委員である「シニアスタッフ」代表による「SGH全国高校生フォーラム（文部科学省主催）」での発表で、歴代のシニアスタッフが取り組んできた内容を凝縮させて思考したものです。「豊かなディスカッションに意義がある」という見解は、歴代の学院生たちが自力で築き上げてきた独自のもので、SGHに関わってきた教職員も敬意と誇りを感じています。

いま、ウィルスの世界的な拡大により国境を越えた人の移動が大幅に制約され、グローバルな志向をもった教育実践も厳しい状況下に置かれています。SGHで培った国際共生とパートナーシップの力を信じ、これを乗り越えていければと思っております。

これまで本学院のSGHの取り組みにご協力くださった企業・団体・大学関係者の皆さま、惜しみないご支援をくださった歴代の保護者の会・同窓会の皆さま、そして申し分のない意欲・能力・チームワークを発揮してプロジェクトの中心となってくれた卒業生・在校生の皆さんに心より感謝申し上げます。

理数関連プログラム報告 (2019年12月～2020年6月)
(詳細は学院Webサイトを御覧ください)

◆国際交流活動

□ Mahidol Science Fair 2020およびMahidol Wittayanusorn School(MWIT)との交流活動(タイ研修)

1月30日(木)～2月7日(金)に生徒10名がMWITSを訪問し、科学シンポジウムで研究発表・課題コンペに参加するとともに、MWITの授業参加・部活動参加、バディとの遠足・郊外研修など多彩なプログラムに参加しました。

□ミニシンポジウム「国際交流へのいざない」(4月30日16:00～17:30)

学院生の中には国際交流活動を楽しみにしていた方も多いと思います。国際交流の良さを伝え、モチベーションを本庄高等学院生に維持してもらいたいと考え、このイベントを企画しました。立命館大学大学院教職研究科准教授田中博先生による基調講演「国際交流へのいざない」の後、清真学園十文字秀行先生・本庄学院OG小川いぶきさんをパネラーに加え、パネルディスカッションを行いました。120名の学院生が参加し、質疑応答も盛り上がりました。

◆地域貢献活動

□本庄市民シンポジウム「川のシンポジウム2020」

3月14日(土)に本庄早稲田リサーチパークに於いて、標記シンポジウムを本庄学院・藤田小学校の主催で開催する予定でしたが、休校措置に伴い中止となりました。

□市内小学校での科学教育活動(講義・実験)

・12月5日(水)藤田小、テーマ「海の環境
～ちりめんモンスターを探そう！～」
・ 12月10日(火)北泉小、テーマ「川の生物」「水質(パックテスト実験」
・ 12月11日(水)東小、テーマ「川の生物」「水質(パックテスト実験」
・12月18日(水)藤田小、テーマ「割りばしと輪ゴムで強い橋を作ろう
～橋コンテスト～」
・ 1月8日(水)藤田小、テーマ「光の不思議～偏光板で栞を作ろう～

◆「これがサイエンスだ！」特別講義、ゼミ合宿

本学院教職員による特別講義「これがサイエンスだ！」を、以下の内容で実施しました。講義内容についてさらに理解を深めたい生徒はゼミ合宿に参加し探究活動を行いました。2020年度はオンラインによる特別企画も積極的に行っています。

・特別講義
「究極の物理法則を求めて」(物理科:渡邊新大　非常勤講師)　(12月09日)
「大腸菌の遺伝子組み換え」(生物科:坂本玲　非常勤講師)　(12月12日)
「量子コンピュータは世界を変えるか」(数学科:峰真如　教諭)(2月14日)

・ゼミ合宿
冬合宿では1年生16名、2年生12名、3年生8名が参加し、数学、生物、情報、数学パートに分かれて2泊3日で研究活動を行いました。また、1日目夜には、本学院数学科専任教諭による特別講義「方程式の解の考察」、「数列の整数性とクラスター代数」、3日目には成果報告会も行われました。

・オンライン特別企画
「数学ソフトウェアGeoGebraの使い方講座」(数学科:太田洋平　教諭)(4月25日)
「数学と双対性−射影幾何学と双対原理−」(数学科:太田洋平　教諭)(4月28日)
「宇宙線を捕まえろ！」(物理科:大塚未来　教諭)(5月7日)
「理系講師による学院生に向けた座談会」
(情報科、数学科、理科　非常勤講師有志)(6月実施予定)

Mahidll Science Fair 2020

ゼミ合宿での実験の様子

小学校プログラム

パックテストによる水質調査

生徒達の活躍

◆陸上部

第31回U20選抜競歩大会出場
女子5km競歩　野村 音々(3)　26’06”
栗島 優都紀(3)

埼玉県陸上競技選手権
円盤投げ　4位
(高校生1位)
関東陸上選手権大会
円盤投げ　出場
円盤投げ　38m80
埼玉県高校ランキング1位

U18　2020強化指定選手
小藥　空(3)
吉田 英晃(3)
若林　樹(3)
高田　和(2)
髙橋 音雄(2)
牧　依瑠香(2)

◆バスケットボール部(男子)

バスケットボール部(男子)は、3年ぶりに県大会出場を果たしました。

新人大会県大会
1月10日(金)上尾運動公園体育館
早大本庄　51 - 94　本庄東

残念ながら初戦敗退となってしまいましたが、チームとして貴重な経験ができました。今後も応援よろしくお願いします！

◆ラグビー部

新人戦県北大会
1回戦　12月14日(土)
早大本庄19−0 松山
準決勝　12月22日(土)
深谷102−0早大本庄
3位決定戦　1月7日(月)
熊谷工業22−7早大本庄

◆昨年のワールドカップの日本チームの大活躍により、大きな盛り上がりを見せていたラグビーでしたが、コロナウイルスの影響で、今は世界中のラガーマンが競技を自粛しています。早大本庄ラグビー部も3月以来活動を休止しておりますが、部員たちは自宅等で各自、筋トレなどに励んでいます。新入生の勧誘もまだできておりませんが、登校が再開したら、是非一緒にグランドで汗を流しましょう!!早大本庄ラグビー部では、ほぼ全員が高校からラグビーを始めた初心者です。経験は問いませんので、少しでも興味のある人は是非にグランドに遊びに来て下さい。待ってます!!

◆ソフトテニス部(男子)

埼玉県インドア大会･男子団体戦
(2019年12月25日@所沢市民体育館)
第4位
出場選手:北原辰徳(現2E)・玉貫陽都(現3E)ペア、吉江隆一朗(現3H)・河野椋也(現3E)ペア、宮下凌久登(現2H)・矢島朋貴(現2A)ペア。
予選トーナメント:1回戦:早大本庄③−0川口市立、2回戦:早大本庄②−1熊谷。
決勝リーグ:早大本庄0−③川越東、早大本庄0−③昌平、早大本庄0−③草加西。

埼玉県私学大会･男子団体戦
(2020年1月6日@川越総合運動公園)第4位
出場選手:県インドア大会と同じ。
1回戦:早大本庄③−0城西川越、
2回戦:早大本庄②−0立教新座、
3回戦:早大本庄0−②昌平。

埼玉県私学大会･男子個人戦
(2020年1月7日@くまがやドーム)
ベスト32　北原・玉貫ペア、吉江・河野ペア。

◆ソフトテニス部(女子)

大会名:埼玉県私立高校ソフトテニス大会・女子個人戦
開催日:2020年1月6日
会　場:彩の国くまがやドーム
成　績:第3位
選　手:岡本百葉(現2F)・今泉菜々(現2G)ペア

◆硬式テニス部(男女)

北部地区学年別大会(1月12日～13日)
男子1年生の部　優勝　湯原・三森
男子2年生の部　優勝　武樋・滝澤
4位　藤井・野原
女子1年生の部　優勝　長谷川(柚)・山岸
女子2年生の部　準優勝　葛西・大竹

◆サッカー部

①「2019年度JFA高円宮杯U18埼玉県北部1部リーグ優勝」→「2020年度JFA高円宮杯U18埼玉県2部リーグ昇格」
②令和元年度高校サッカー新人大会北部支部予選　準優勝【県大会出場】
1/19(日)2回戦対小川　3-0 勝
1/25(土)3回戦対松山　3-0 勝
2 / 1(土)準決勝対熊谷　2-1 勝
2 / 2(日)決勝対成徳深谷　0-3 負
③令和元年度高校サッカー新人大会　ベスト16
2 / 8(土)対聖望学園　1-2 負

◇囲碁将棋部

第35回関東地区高等学校囲碁選手権大会
(1月栃木)女子個人出場
1年(現2年)越後美波
第28回全国高校将棋新人大会
(2月福島)男子個人出場
2年(現3年)近藤圭

学校評価をご覧ください

2019年度の学校自己評価を作成し、学校関係者評価委員の方々と、第3者評価委員会の方々に、客観的に本庄高等学院を評価していただきました。

自己評価と、評価委員会での質疑の結果は、本庄高等学院ホームページを開いていただき、学校案内→学校評価→2019年度自己評価・関係者評価と進み、ご覧いただけます。

(以下にその一部を抜粋しました。ご覧ください。)

早稲田大学本庄高等学院　2019年度学校自己評価ー関係者評価

1. 教育理念・目的ー人材育成像

早稲田大学は早稲田大学教旨に示された3つの建学の理念、すなわち「学問の独立」・「学問の活用」・「模範国民の造就」に基づき、教育・研究を展開している。その上に、00年に「21世紀の教育研究グランドデザイン」を発表し、08年には創立125周年を契機に「Ｗａｓｅｄａ　Ｎｅｘｔ　125」を策定して「早稲田からWASEDAへ」をスローガンに定めて広く世界で活躍する人材の育成に努め、グローバルユニバーシティとして構築することを目指すこととした。さらに、創立150周年を展望した「Ｗａｓｅｄａ Ｖｉｓｉｏｎ　150」を12年11月に策定し、「アジアのリーディングユニバーシティ」として世界に貢献する大学であり続けるためのビジョンを社会に公表し、目指す方向性を明らかにしている。

早稲田大学本庄高等学院(以下本庄学院と略)は早稲田大学創立100周年を記念して1982年に男子校として開校した。2007年に男女共学となり、2012年に現在の校舎に移転した。全国各地および世界各国から、将来早稲田大学を目指す意欲的な生徒を集め、自由と自立の校風の中、「自ら学び、自ら問う」という教育方針のもとで「進取の精神」に満ちた活力ある生徒を育てることを教育の基本としてきた。

加えて、本学院も「Ｗａｓｅｄａ　Ｖｉｓｉｏｎ 150」に関連し、12年11月、「本庄高等学院の将来構想」を発表した。すなわち地域の特色を生かした「森に想い土に親しむ」教育をいっそう発展させた、教科横断型の教育・研究活動を通して、社会の各分野で活躍できるリーダーを育成することを目的としている。本学院は早稲田大学での一貫した教育体系の中に位置づけられ、卒業生全員が早稲田大学の各学部に進学すると規定されている。

したがって本学院は、早稲田大学教旨・「Ｗａｓｅｄａ Ｖｉｓｉｏｎ 150」、そして「本庄高等学院の将来構想」に基づいて教育・研究活動を行なうことが目的である。生徒に対しては、知的関心を高め論理的な思考力、豊かな感性を育成し、さらに大学における専門的な学問の分野も模索させ、また大学での幅広い本格的な学問研究に必要な、基本的な学力・体力を養成することを目指している。その目的は本年度においても継承されている。